

神への恐れ

「これは、あなたがたの神、【主】が、あなたがたに教えよと命じられた命令——おきてと定め——である。あなたがたが、渡って行って、所有しようとしている地で、行うためである。それは、あなたの一生の間、あなたも、そしてあなたの子も孫も、あなたの神、【主】を恐れて、私の命じるすべての主のおきてと命令を守るため、またあなたが長く生きることのできるためである。」(申命記6:1-2)

○「神を恐れる」または「主を恐れる」は旧約聖書で神の民にしばしば与えられた命令である。今日キリストに従う私たちにとって、この命令が何を意味するのかを理解することは大切である。本当に主を恐れるときのみ、私たちはあらゆる破壊的で悪魔的な恐れから解放される。神を恐れることによって、私たちは自分勝手な道に行き、神に逆らい、魅力的に見える不道德な行動に引かれる私たちの内にある傾向を避けることができる。

主への恐れの意味

「主を恐れる」という命令を理解するには、信仰者と神との関係について次のことを知っておく必要がある。

(1) 神は愛の方であわれみ深く罪を赦される方であるけれども、同時に聖く公正で正しい方であることをまず認識しなければならない。神を知り、ご性格を理解することは(⇒箴2:5)、神の公正と聖さ(純粋性、完璧性、完全な品性、悪からの分離)が罪をさばくという事実を受入れることである(神の特性と私たちとの関係について →「神の属性」の項 p.1016)。

(2) 主を恐れることは、その神聖さに恐れおののき最高の敬意を払い、偉大な栄光と荘厳さと聖さと力を持つ方としてあがめることである(→ピリ2:12注)。たとえばシナイ山で「山の上に雷といなずまと密雲があり、角笛の音が非常に高く鳴り響いた」中でイスラエルの人々に神がご自分を現されたとき、その偉大な力を恐れて「民はみな震え上がった」(出19:16)。そして神に直接対面しないですむように、モーセに神のメッセージを伝えてくれるように懇願するほどだった(出20:18-19, 申5:22-27)。また詩篇の記者は創造者としての神について瞑想したときに「全地よ。主を恐れよ。世界に住む者よ。みな、主の前におののけ。まことに、主が仰せられると、そのようになり、主が命じられると、それは堅く立つ」と言っている(詩33:8-9)。

(3) 主を恐れるなら、信仰者は救いを求める信仰と信頼を主だけに置く。たとえばイスラエルの人々が乾いた土地を渡って紅海を渡り、追って来たエジプトの軍隊が神に滅ぼされるのを見たとき、人々は「主を恐れ、主・・・を信じた」(→出14:31注)。詩篇の記者は主を恐れる人々に「主に信頼せよ。この方こそ、彼らの助け、また盾である」と呼びかけている(詩115:11)。言い換えれば、主への恐れは神の民の中に主に對する確信と希望と信頼を生み出す。これはあわれみと罪の赦し(ルカ1:50, ⇒詩103:11, 130:4)、靈的救い(詩85:9)を神に求めるときに必要なものである。

(4) 神を恐れることは神が罪に対して怒る方であり、神に対してごう慢になって律法を破る人々を罰する力を持っておられることを認めることである(⇒詩76:7-8)。アダムとエバがエデンの園で罪を犯したとき、ふたりは恐れて神の臨在から隠れようとした(創3:8-10)。モーセが罪を犯したイスラエル人のために四十日四十夜を祈りの中に過したとき、この神の恐れを体験した。「主が怒ってあなたがたを根絶やしにしようとした激しい憤りを私が恐れたからだった」(申9:19)。新約聖書でもヘブル人への手紙の著者は迫り来る神の報復と審判を認めて「生ける神の手に陥ることは恐ろしいことです」と書いている(ヘブ10:31)。

神を恐れる理由

主を恐れる理由は先に示した「主への恐れの意味」の中にある。(1) 主はすべてのものとすべての人の創造者として比類のない力を持っておられるので、私たちは主を恐れるべきである(詩33:6-9, 96:4-5, ヨナ1:9)。(2) さらに創造されたもの(人類を含む)の上に驚くべき力を及ぼし続けておられることが神を恐れる理由である(出20:18-20, 伝3:14, ヨナ1:11-16, マコ4:39-41)。(3) 私たちが神の聖さ(純粋性、完璧性、悪からの分離)を認めるとき、人間の霊は神を恐れるという反応を当然示す(黙15:4)。(4) 神の栄光の輝き(目に見える具体的なしるし)を見た、あるいは体験した人はだれでも恐れおののかずにはいられない(マタ17:1-8)。(5) 神から絶えず祝福、特に罪の赦しを受続けるなら(詩103:4)、私たちは神を恐れ神を愛するように導かれていく(1サム12:24, 詩34:9, 67:7, エレ5:24, →「神の摂理」の項 p.110)。(6) 何よりも、主は全人類をさばく正義の神であるという事実こそ神への恐れを生み出す大きな理由である(申17:12-13, イザ59:18-19, マラ3:5, ヘブ10:26-31)。神は私たちの行動と動機を善悪ともに知っておられ、私たちは現在も将来の個人的な審判の日にも自分の行動に対して責任を取らされるということが厳かで決定的な真理なのである。

主への恐れと私たちの生活への影響

主への恐れは単に聖書の教えや原則、あるいは考えというだけではない。これは多くの意味で私たちの日常生活に直接関係している。

(1) もし主を恐れるなら、私たちは主の命令に従いみことばに沿う生活をし、罪に対して「ノー」と言うはずである。神がシナイ山でイスラエル人に恐怖を体験させた理由の一つは、人々に罪を避け退けて律法に従うことを学ばせるためだった(出20:20)。モーセはイスラエル人に対する最終説教の中で繰返し神を恐れることと、神に仕え従うこととを関連させて話している(申5:29, 6:2, 24, 8:6, 10:12, 13:4, 17:19, 31:12)。詩篇の記者によれば、主を恐れることは主の命令を喜ぶこと(詩112:1)、律法の原則に従うこと(詩119:63)と同じである。ソロモンは、「主を恐れることによって、人は悪を離れる」と教えている(箴16:6, →8:13)。伝道者の書では、人類の義務は全部「神を恐れよ。神の命令を守れ」(伝12:13)という二つの簡潔な命令に要約されている。逆に、よこしまな生活をし神に逆らうことに満足している人々がそうするのは「彼の目の前には、神に対する恐れがない」からである(詩36:1-4)。

(2) 主を恐れることは個人の生活に影響を与えるだけでなく、家族にも影響するはずである。神は従う人々に、その子どもたちに罪を憎み神の命令を愛するように訓練することによって、神を恐れることを教えなければならぬと言われた(申4:10, 6:1-2, 6-9)。聖書はしばしば「主を恐れることは、知恵の初め」であると言っている(詩111:10, 箴9:10, →ヨブ28:28, 箴1:7)。子どもたちが神の知恵の原理に従って生きて行くようになることを(箴1:1-6)キリスト者は基本的目標にするべきである。まず主を恐れることを子どもたちに教えなければならぬ(→「親と子ども」の項 p.2265)。

(3) 神のことばの真理を適用したときと同じように(ヨハ17:17)、主を恐れることは神の民に対して聖化(きよめ、罪からの分離、霊的成熟)をもたらす。私たちは罪を憎み悪から離れるようになる(箴3:7, 8:13, 16:6)。そして言うことばにも気をつけるようになる(箴10:19, 伝5:2, 6-7)。また良心と正しいことに対する敏感さが鈍らないように守られる。主を恐れることには霊的にきよめ、純化し、修復する効果があり、それは永遠に変わらない(詩19:9)。

(4) 主への聖い恐れは全存在をもって主を礼拝するように神の民に働きかける。神を恐れる人々は神をすべてのものの主として賛美しあがめる(詩22:23)。ダビデは礼拝をする人々は「主を恐れる人々」と同じだと言った(詩22:25)。歴史の終りに永遠の福音(イエス・キリストに関する「良い知らせ」)を宣べ伝える御使いは地上のあらゆる人々に神を恐れよと呼びかけるとすぐに、「神をあがめよ。・・・天と地と海と水の源を創造した方を拝め」(黙14:6-7)と付け加えている。

(5) 神は主を恐れる人々に対して報いることを約束された。「謙遜と、主を恐れることの報いは、富と誉れといのちである」(箴22:4)。ほかに安全と、死からの守り(箴14:26-27)、日々の必要が備えられるこ

